吾輩はカレーである

――序章～第３講――

序章　吾輩はカレーである

吾輩はカレーである。名前はまだない。
もっとも、給食室では「今日のカレー」と呼ばれているらしい。大きな鍋の中で目を覚ましたとき、吾輩はまず、自分がなんとも良い香りをしていることに気がついた。
玉ねぎ。にんじん。じゃがいも。肉。それに、どこか遠い国からやってきたスパイスたち。みんなが力を合わせて、吾輩になったのである。

「今日も人気者だね」
隣から声がした。見ると、白くて小さなご飯粒がこちらを見ている。
「人気者？」
「知らないのかい。カレーの日は、いつも食缶が空っぽになる」
そう言うと、ご飯粒はそれ以上何も話さなかった。
なんだか、ずいぶん物知りそうなやつである。後で分かったことだが、このご飯粒、やたらと物事を知っている割に、肝心なところではぐらかす癖があった。

やがてチャイムが鳴った。給食の時間だ。吾輩は食缶に入れられ、３年２組の教室へ運ばれていく。
教室では、生徒たちが楽しそうに話していた。
「今日はカレーだ！」
そう叫んだのはケンジだった。食べることが大好きで、思ったことをすぐ口にする。
その隣ではアカリが笑っている。物静かだが、時々鋭いことを言う。
ケンジとアカリは、ご近所どうしで小学校から仲良し、中学生になっても、お仲間気分が抜けない二人なのだ。
「でも、毎日カレーだったら困るよ」
「なんで？」
「いろいろ食べた方がいいじゃない」
「俺は毎日でも平気だけどな」

二人はそんな話をしている。
実は、吾輩には不思議な力がある。
人間には聞こえないが、人間の話を聞くことができるのである。
特に給食の時間になると、なぜか中学生の会話が聞こえてくる。ついでに言うと、ご飯粒の軽口も、ずっと聞こえてくる。少々うるさい。

吾輩には不思議だった。
同じカレーを前にしているのに、ケンジとアカリの考え方が、どうも少し違う。
片方はとにかく効率と満腹を重んじ、もう片方はバランスと公平を気にする。
この二人の噛み合わないようで噛み合っている会話が、後々ずいぶんな学びの種になるとは、この時の吾輩はまだ知らない。

こうして、吾輩の物語が始まるのである。

第１講　吾輩のうしろにひかえし者はだれだ

吾輩はカレーである。
生まれて数日、吾輩はまだ自分のことをよく知らなかった。知っているのは、鍋の中が温かいことと、隣のご飯粒がやたらと物知り顔をしていることくらいである。
「そういえば君、自分が何でできているか知ってるかい」
ご飯粒が聞いてきた。
「知っているとも。玉ねぎ、にんじん、じゃがいも、肉、それにスパイスだ。吾輩は完璧に把握している」
「材料は知ってるんだ。でも、それがどうやって君のところまで来たかは？」
「……鍋の中で勝手に集まった」
「勝手にではないと思うけどね」
吾輩は少しむっとした。自分の出自を疑われるのは気分の良いものではない。

その日の給食の時間、吾輩は３年２組の教室に運ばれた。ケンジが待ちきれない様子でスプーンを構えている。
「今日はカレーだ！」
「毎回同じこと言ってるよね」とアカリ。
「毎回同じくらい嬉しいんだからいいだろ」

吾輩はそのやりとりを聞きながら、少し誇らしい気分になった。しかしご飯粒が水を差す。
「誇らしいのは結構だけど、君、自分がどこから来たか、まだ調べてないよね」
食べられるまでの残り時間はそう長くない。吾輩は焦った。
「よし、調べよう」
「何を」
「犯人だ」
「犯人？」
「吾輩をこしらえた犯人を突き止める」
ご飯粒は器から吹き出しそうになった。
「犯人じゃなくて、協力者だと思うけどね」

窓の外をトラックが一台通り過ぎた。吾輩はふと、それを目で追った。今まで気にも留めなかった光景である。
「あのトラック、何を運んでいるんだ」
「さあ。牛乳かもしれないし、じゃがいもかもしれない」
「じゃあ、あれも吾輩に関係あるのか」
「あるかもね。ないかもね」
「はっきりしろ」
「はっきりしないのが世の中というものだよ」
吾輩はしばらく黙って考えた。じゃがいもは畑にあった。畑からここまでは歩いてこない。誰かが運んだはずだ。運んだ人は誰かに頼まれたはずだ。頼んだ人はまた別の誰かと話をつけたはずだ。

「なんだか、吾輩の後ろに、ものすごい数の人がいる気がしてきた」
「今頃気づいたのかい」
「馬鹿にするな。カレーは物覚えが早い方ではない」
「それは自分で言うことじゃないと思うけど」

ケンジが牛乳を飲みながらつぶやいた。
「この牛乳ってさ、どこから来るんだろうな」
「牧場でしょ」とアカリ。
「牧場から学校までは？」
「トラックじゃない？」
「誰の」
「運送会社の人の」
吾輩は思わず身を乗り出した（カレーに身を乗り出す機能はないが、気分の話である）。
「聞いたか、ご飯粒。牛乳もトラックで来るらしいぞ」
「君と同じだね」
「吾輩と牛乳が仲間だったとは」
「そういう意味で言ったんじゃないんだけどな」

考えれば考えるほど、吾輩の周りには見えない誰かが増えていく。農家、運転手、整備士、道を作った人、信号を管理する人。誰一人として吾輩に挨拶をしたことはない。それなのに、その全員がいなければ、吾輩はこの皿の上に存在できなかった。
「なんだか、急に自分が偉くなった気がしてきた」
吾輩がそう言うと、ご飯粒は静かに答えた。
「支えられているのと、偉いのとは、たぶん別の話だと思うよ」
「細かいことを言うな」

そのとき、ケンジがスプーンを手に取った。
「いただきます！」
教室に元気な声が響く。
吾輩はふと思った。今この瞬間、自分は一人の力ではなく、名前も知らない大勢の力によってここにいる。誰も手柄を主張しないし、誰もお礼を求めてこない。それなのに、ちゃんと繋がっている。
「不思議な仕組みだな」
吾輩がつぶやくと、ご飯粒はあくびをしながら言った。
「その仕組みには、まだ名前があるんだけど、それはまた今度の話にしよう」
「勿体ぶるな」
「勿体ぶってるんじゃない。眠いだけだ」

こうして吾輩の最初の旅は、思いのほか呑気に幕を閉じたのである。

第 2 講　吾輩に値段を付けるだって？

「吾輩には値段がない」
ある朝、吾輩はそのことに気がついて、少し落ち込んでいた。
「ないんじゃなくて、書いてないだけだと思うけど」
ご飯粒が言った。
「同じことだ。スーパーのパンには値段がついている。吾輩にはない。つまり吾輩は無価値ということだ」
「極端だな。給食だからタダに見えるだけで、本当は値段があるんじゃないかな」
「では吾輩はいくらだ」
「知らないよ、そんなの」
吾輩は納得がいかず、しばらく皿の上でむくれていた。

その日の昼休み、ケンジが不満げに言った。
「この前、コンビニで新作パン買おうと思ったら、もう売り切れてた」
「人気だったんだね」とアカリ。
「人気なら、もっと作ればいいのに」
「作るのにもお金がかかるんだよ、たぶん」
「じゃあ値段上げればいいじゃん」
「それはそれで、買う人が減るかもよ」
ケンジは首をかしげた。
「難しいな」

吾輩はその会話を聞きながら考えた。人気があるからといって、値段を無限に上げられるわけではないらしい。かといって、人気がなければそもそも値段のつけようがない。
「つまり」吾輩は言った。「値段というのは、誰かが偉そうに決めているわけではないのか」
「偉そうに決めている人もいるかもしれないけど、大抵はそうじゃないね」
「では何が決めているんだ」
「欲しいと思う気持ちと、払えるお金。その綱引きだよ」
「綱引き。地味だな」
「地味だけど、世界中でずっと続いている綱引きだよ」
吾輩は少し感心したが、すぐに別の疑問を思いついた。
「では、もし吾輩がスーパーで売られていたら、いくらだ」
「君、鍋から出たら崩れるタイプのカレーだから、売り物にはならないと思うけどね」
「くだらない現実を持ち出すな」
「現実は大抵くだらないものだよ」

ケンジがまた口を開いた。
「そういえばさ、百円あったら何が買えるかって、意外と幅あるよな」
「うん、ジュースも買えるし、お菓子も買えるし」
「でも家は買えない」
「そりゃそうでしょ」
「じゃあ、みんな百円で何を買うか、毎回考えてるってことか」
アカリは少し驚いたように言った。
「言われてみれば、そうかも」

吾輩はその話を聞きながら、自分の中で何かがつながった気がした。値段というのは、単なる数字ではなく、「これを選ぶか、それとも他のものを選ぶか」という無数の判断が積み重なった結果らしい。
「なんだか値段が、急に真面目なものに見えてきた」
吾輩がそう言うと、ご飯粒はにやりとした。
「真面目になったところで、悪いニュースがある」

「なんだ」
「同じようなカレーが、他にもあるということだよ」
「なに？」
「世の中には、君だけじゃないカレーがいっぱいある」
吾輩はしばし絶句した。自分がこの世に唯一のカレーではないという事実は、なかなかの衝撃だった。
「では吾輩は、その他大勢のカレーの一つに過ぎないというのか」
「その他大勢というか、ライバルがいるということだね」
「ライバル……」
「その話は、また次にしよう」
ご飯粒はそう言うと、それ以上何も語らなかった。

吾輩は窓の外を見た。今日もいつも通りの給食の風景だったが、なんとなく、これまでとは違う目で世界を見ている自分に気がついたのである。

第 3 講　ライバル揚げパン、なにするものぞ

「ライバルがいる」
先週のご飯粒の一言が、吾輩の頭から離れなかった。
「ライバルとは、具体的に誰なんだ」
朝一番でそう詰め寄る吾輩に、ご飯粒はあくびをした。
「そんなに焦らなくても」
「焦るに決まっている。吾輩の地位が脅かされているのだぞ」
「地位って、給食のカレーに地位なんてあったっけ」

その日、給食の献立表を見ていたケンジが声を上げた。
「今週、揚げパンも出るじゃん」
「人気だもんね」とアカリ。
「カレーの方が人気じゃないのか？」
「どっちも人気だと思うよ」
「甲乙つけられないってことか」
「そういうこと」

吾輩はこの会話を聞き、密かに動揺していた。揚げパン。今まで意識したこともない存在が、急に強大な敵に見えてくる。
「揚げパンとは、いったい何者だ」
ご飯粒に詰め寄ると、答えは呆れたようなものだった。
「ただのパンだよ。揚げてあるだけの」
「ただのパンが人気を二分するとは、由々しき事態だ」
「君、揚げパンに親でも殺されたのか」
「そんな物騒な話はしていない。単に危機感を抱いているだけだ」

昼休み、二人の会話は続いていた。
「もしカレーと揚げパン、どっちかしか給食に出せないってなったらどうする」
アカリの問いに、ケンジはしばらく悩んだ。
「無理だろ、そんなの」
「でも予算には限りがあるんだって、この前先生が言ってたよ」
「じゃあ、どうやって決めてるんだろうな」
「人気投票とか？」
「それはそれで揉めそうだ」
吾輩は聞き耳を立てながら考えた。ライバルがいるということは、単に敵対するということではなく、選ぶ人がいて、その人の気持ちを競い合っているということらしい。
「では吾輩は、揚げパンに勝たねばならないのだな」
「勝つというより、選ばれ続けなきゃいけないってことだね」
「同じことだろう」
「似ているけど、少し違うと思うよ。負けても、そのうち改善すれば選ばれるかもしれないし」
「改善？　カレーが改善するとは、どういうことだ」
「例えば、辛さを変えたり、具を変えたり」
「吾輩の中身を勝手にいじるなと言いたいところだが、悔しいので黙っておく」

そのとき、ケンジが言った。
「でもさ、ライバルがいるっていいことなんじゃない？」
「どうして？」
「だって、負けたくないから、みんな頑張るだろ」
アカリは少し考えた。
「それはそうかも」
「もしライバルがいなかったら、頑張らなくてもよくなるかもな」

吾輩はハッとした。競争というのは、単に勝ち負けの話ではなく、みんなの工夫を引き出す仕掛けでもあるらしい。少しだけ、揚げパンへの敵意が和らいだ。
「なるほど、揚げパンも案外、悪い奴ではないのかもしれない」
「最初から悪い奴じゃないよ、パンだから」
「細かいことを言うな」
ご飯粒は静かに言葉を継いだ。
「でも、競争にはいいことばかりじゃない面もある」
「どういうことだ」
「負ける側の話も、いずれしよう」

吾輩は少し不安になったが、ひとまず今日のところは、揚げパンとの共存を心に決めたのだった。